教育実践

「学生参画授業」と人間らしい〝学びの場づくり〟

―「ラベルワーク」による「クラスワーク」を中心に―

林　義樹
（武蔵大学）

はじめに

「巧妙に管理された参加」に慣らされてしまった国民の手に、「自ら主体的に参加する」行為を取り戻さねばならない。とりわけ教育の分野では、学習者の「参加」の機会の量的拡大に伴い、その質的充実が問われる時代が到来している。学校教育、特に高等教育において、この課題は急務である。

本稿では、筆者が、大学教師として、十七年間継続して実践・開発してきた「参画授業」と呼ぶ授業の理論と方法及び最近の実践を紹介する。特に「ラベルワーク」を用いて、教師・学生の「参画力」を育み、高めることによる人間らしい〝学びの場づくり〟のあり方について考えていきたい。

「参画授業」とは

「参画授業」とは、学生自身が、〝学びの場づくり〟をめざして、授業を計画する段階から参加し、実施・評価・伝承していく授業方式のことである。筆者はこれまで奉職してきた三大学、二短期大学において、のべ一万人に及ぶ学生と共に、本方式の開発を行ってきた。その中で、以下に紹介する「参加の三段階理論」と「参画型の学びのしく

み」を構築した。

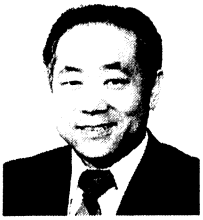
参加の三段階理論

表1に示すように、まず、参加の第一段階を「参集」と呼ぶ。この段階において学生は、その場にいあわすだけであり、他者との交流は見られずまったく個人レベルの行動である。

次に、参加の第二段階を「参与」と呼ぶ。この段階では、学生同士、または教師と学生との間で質疑・応答が活発になされ、自ら発信・交流し、情報交換を行う集団レベルの行動が見られる。要するに、第一段階の個人としての参加行動の枠を破って他者と積極的にかかわる段階である。

さらに究極的な参加の段階を「参画」と呼ぶ。この段階では、学生は、教師と共に授業という〝学びの場づくり〟を担い合うべく自ら企画を立て、責任を持って実施し、評価し、伝承する。ここまでの段階を踏んではじめて、本質的に主体的な参加行動だといえる。図1は、この三つの段階のイメージを比較したものである。この理論は、教育プログラムへの参加だけでなく、社会集団、組織、コミュニティー等への参加の段階の説明にも援用可能である。

この三段階理論にしたがって、「参画」をより一般的に定義すると、「参集・参与段階のかかわり方を踏まえて、その場の状況の全体像を共有化しながら計画段階から実施・評価・伝承段階にまでかかわることで、〝場づくり〟そのものを担う包括的なかかわり方」となる。そして、筆者が実践してきた「参画授業



はやし・よしき●一九四六年福岡市生まれ●専攻は教育学●主な著書に『学生参画授業論―人間らしい〝学び場づくり〟の理論と方法―』（学文社九三年）『開かれた学校と学習の体験化』（共著教育研究所九二年）『教育実習』（共著ぎょうせい九〇年）など●「参画」とは、参加させる側からは、包み込み（インボルブ）です。他方、参加する側からは、自己投企（コミットメント）です。私は今、後者の側面に注目しています。コミュニティーを、組織を、郷土を、国を、地球を、そして家族を、恋人を、心から生きいきと愛する生き方・愛し方として、この「参画」を探究していきたいと思っています。愛にも、参集型・参与型・参画型があるような気がしています。

表1　参加の三段階

段　階	コンセプト	キーワード	参加の局面	行動のレベル	理解の程度
第1段階	参集 Attendance	いあわす	実施段階のみ	個人的	断片的
第2段階	参与 Participation	かかわる	評価段階にも	集団的	部分的
第3段階	参画 Commitment	にないあう	伝承段階にも	組織的	包括的

（クラスワークと呼んでいる）とは、まさにこの「参画」の直接体験を効果的に学習者に提供し、「参画力」を高めるシステムなのである。

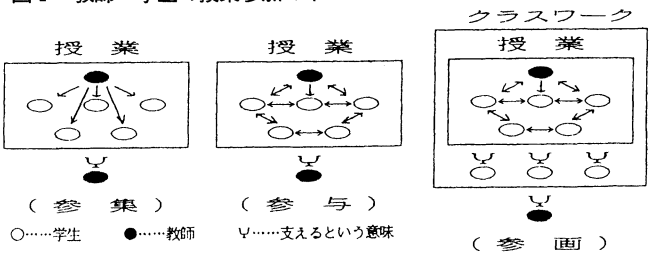
参加を引き出す七つのしくみ

このしくみは、先述した三段階理論をもとに「参画型の学び」をめざし、学習者の参加意欲を高めるための、極めて具体的で一般性の高い技術体系で、七つのしくみからできている。

①プレゼンカッションワーク

チームまたは個人で設定したテーマに基づきデータを収集し、自分たちで問題解決的に探究活動を行い、研究した成果を自ら主催者になって発表（プレゼンテーション）し討論（ディスカッション）し、その成果を再度、各自・各グループの研究・探究・創作に結晶させる知的共同作業のしくみ。

図1　教師・学生の授業参加のイメージ



（1993-2, 竹迫）

②スタッフワーク

学生が授業運営のスタッフとなり、学びを支える責任者として、ひと仕事を達成するしくみ。

③作品化ワーク

授業で配布されたプリントや研究資料、レポートなどをファイルに整理し、見出しや目次をつけたり考察を加えて作品にする作業である。これが「参画授業」における評価の主たる対象となる。

④データベースワーク

「作品化活動」で作成された作品群を「学ぶ者に開かれた共有財産」としてデータベース化し、共同利用するしくみ。

⑤ラベルワーク

「感想ラベル」と呼ばれる紙片を媒体に、意見交流をはかり、それらを用いて自らの学びを振り返る「PR図解」によるラベルケーションのシステム。及び、このラベルをフルに活用して、自分たち独自の思考の方式を開発して使いこなすしくみである「ラベル思考」の二つのシステムがある。特に「参画授業」では、学生自身に、高度で創造的

な情報処理能力が要求されるので、ラベルを用いることで、多種・多量の情報を圧縮して、短時間に正確に処理する必要がある。特に、KJ法・NM法・イメージ法等による「ラベル思考」が有効である。

⑥サポートワーク

参画授業を体験した学生（先学）が後学（後輩）に授業づくりの方法を伝承しながら、教師に対して学生の立場から授業についての提案を行いつつ、自らも学ぶしくみ。逆に、後学の側からすると、先学に積極的に学ぶしくみ。筆者の実践によれば、このしくみこそ「参画授業」の成功の決め手と考えられる。この活動により、学生自らがその大学における固有の「学び」の文化づくりに参画することになる。

⑦スーパーバイズワーク

参画段階における教師の役割として、高次元から学生の活動をアドバイスするしくみ。

「参画授業」では、従来、教師のみが行っていた授業の計画等の領域に学生が参加することになるので、教師はこの学生の主体的な活動を見守りながら、いわゆる〝はいまわり〟を脱して、学生の〝学び〟の質を、高レベルへ引き上げるという新しい力量が要求されてくることになる。

実践事例

「生活指導論」の概要と特徴

本授業は、教職課程科目のひとつで、履修した五十名の学生は、中学・高校の教師を目指している。筆者は、本授業の最終的なねらいを「自分自身の生活指導観の構築」に設定した。さらにこのプログラムを通じて、授業の当事者である学生の「学びへの主体性」が芽生え、自己発見や自己改革に直面することを期待した。結果的には、学生が「部分的に参画」する形態で授業は展開した。

本授業のプログラム上の特徴は、以下の三点である。第一点は、初回の授業で、現時点での各自の「生活指導観」をレポートとして提出させ、最終授業でも同じテーマで作成したレポートと比較し、半期の授業を通して自分の〝観〟にどのような変革が生じたのか、客観的に分析させたこと。

第二点は、本授業のメインテーマである「自分自身の生活指導観」を創りあげるために、「ラベル」を学生が自己の〝観〟を形成していくための思考媒体として用いたこと。

第三点は、四回目から九回目までの「ラベルワーク」のプログラムは、学生側からの要望を取り入れ、学生有志に

表２　「生活指導論」授業経過

回	日　付	単元	授業のねらい	活動内容
1	9／24	オリエンテーション	☆「自分自身の生活指導観」を持とう。	●「生活指導とは何か」についてのレクチャー ●授業の展開(参加の三段階理論)についてのレクチャー ●自分の現在の生活指導観についてのミニ論文を書く。
2	10／1	子供の生活の現状把握	☆子供の生活の現状を踏まえて、班の研究課題を発見しよう。	●生活指導に関する新聞記事についてのレポートを用い生活指導に関する記事を図解としてまとめる。
3	10／8		☆今日の子供の生活をめぐって、その現状・原因・解決策を考察しよう。	●「今日の子供の生活をめぐって、その現状・原因・解決策」という題で書いたレポートを用いて班単位で話し合う。
4	10／15	ラベルワーク	☆ラベルワークで各自の考える現状・原因・解決策をラベル化してみよう。	○ラベルワーク開始 ●現状班・原因班・解決班の３つにクラスを分ける。 ●現状・原因・解決策それぞれについて各々のレポートの中より、自分の最も言いたいことをラベルに書き出す。 ●ラベルチェック
5	10／22		☆班内の意見をまとめてみよう。（その１）	○第１サイクル ●３班ともに第１サイクル・グルーピング・表札づけ
6	10／29		☆班内の意見をまとめてみよう。（その２）	○第２サイクル ●１班…第２サイクル・グルーピング・表札づけ ●２班…第２サイクル・グルーピング ●３班…第２サイクル・グルーピング
7	11／5		☆現状・原因・解決策それぞれを構造化してとらえてみよう。	○第３サイクル・図解化 ●１班…第３サイクル・グルーピング・表札づけ図解化 ●２班…第２サイクル・表札づけ 第３サイクル・グルーピング・表札づけ ●３班…第２サイクル・表札づけ 第３サイクル・グルーピング・表札づけ
	11/6･7･8	自主活動	☆班で協力して図解を完成させよう。	○図書館において班単位で図解完成のための活動を行う。
8	11／12	図解発表	☆現状・原因・解決策の関係を構造化してとらえてみよう。（その１）	○発表会（その１） ●１班発表（現状班） ●質問・コメント・意見 ●２班発表（原因班） ●質問・コメント・意見
9	11／19		☆現状・原因・解決策の関係を構造化してとらえてみよう。（その２）	○発表会（その２） ●３班の発表（解決班） ●質問・コメント・意見 ●～問題解決の筋道～についてのレクチャー 「問題意識をはっきりさせ、研究テーマを設定する」 ●教科書の各章の分担決め
10	11／26	自分なりの生活指導観の探究	☆班員相互の生活指導観を見ていこう。	○“学校としては生活指導にどう取り組んでいるのか、またどう取り組まれてきたか？”について班ごとに見ていく。 ●各班に別れて、自分の担当箇所を発表。
11	12／10		☆体系づけて生活指導観をとらえていこう。（その１）	○各班で考察した部分の発表会① ●第２章、第３章２節、第４章を担当班が発表する。
12	12／17		☆体系づけて生活指導観をとらえていこう。（その２）	○各班で考察した部分の発表会② ●第２章２節、３節、第３章３節を担当班が発表する。
13	1／14	総括	☆半期を通じての自己、および他者の学びの軌跡を見つめてみよう。	○最後に ●学びのプロセスチャートの発表会 ●ワーカーの役割をみんなに知ってもらうために図解を使って説明。（女部田）

よる「部分参画」の企画で行われたということ。

授業展開の考察

ここではまず、先に述べた「ラベルケーション」による学生作品を手掛かりに授業を考察する。

その前に、「感想ラベル」と「PR図解」について若干の説明を加えておこう。

「参画授業」では、毎時間、授業前と授業終了後に三分程度時間を取って、学生にその授業の感想をラベルに書いて提出させている。これを「感想ラベル」と呼んでいる。

授業前には、これから始まる授業に対する期待・予想を、授業後には、発見・気づきを書き、一コマの授業を通しての自分の気持ちの変化を客観的に把握することを促している。この「感想ラベル」を書くことの意味として、次の三つをあげることができる。

①教師に対するフィードバックのための返信機能。
②同じ時間、同じ場所で席を同じくしたクラスの仲間との交流機能。
③毎回の授業での学びのエッセンスを文章表現して、自己の学びの足跡とする記録機能。

このような感想ラベルを、筆者は一定期間手元に留めておいて、学生にまとめて返却し、そのラベルを使用して自分の学びを振り返るための図解を作成させている。この図解を「PR図解」と呼んでいる。この図解作りを通じて、自己の学びの経過（Process）と成果（Results）を視覚的自覚的に捉え直すことができる。

では、具体的に、一学生AさんのPR図解を使って学生の本授業を通じての考え方の変化を考察しながら授業の流れを追っていく。表2、及び図解1を御覧いただきたい。尚、本稿では、授業に取り組む姿勢の変化を考察の主たる対象としたので、Aさんの作品を選んだ。もちろん、自己の「生活指導観」の変化に注目した学生作品も多く提出されたことを断っておきたい。

一回目では、まずこの授業の最終的なねらいを説明し授業をより参画的なものにするために、三段階理論の説明を行った。さらに、「生活指導とは何か」基礎的な知識をレクチャーし、学生一人ひとりに現時点での「生活指導観」を書かせた。PR図解（図解1）の［A］「①前途多難である」という感想のように、今まで自分たちで授業を作っていく体験がない現代の学生には、「とてもついていけないのではないか」という不安の気持ちが表現されている。

二～三回目では、チーム編成を行い、生活指導に関する新聞記事の中で、自分の興味のある内容をもちより、チー

通して得た私の学び～

完成日：1993年1月30日
作成場所；自宅にて
作成者；人文学部日本文化学科 3年
2906097 前原恵美

～はじめてのラベルワークの実践～

待

かえて 10/29
ラベル図解をできない。

終えて 12/29
合いができました。

意見交換が活発結し、とても楽しく

喜び

テーマ；図解を完成させて 11/12
ラベル図解が完成して 感涙です。

テーマ；発表を終えて 11/12
今日はつつがなく(?)発表が終わってうれしいです。班員の皆様にも御苦労様といいたい。
良い思い出と経験と満足感をほどよくブレンドした気分をじっ地よく味わった。

D 授業が過ぎるのが早い

テーマ；学園祭を終えて 1/5
参加をしていない者にとって学園祭の時期はいつもと全く変化のない日々でした。
皆様 御苦労様でした。

あっという間に折り返し地点が来た。"楽しい"という気持ちが先行しているが、得たものも大きいと思う。

I 考えがまとまる

テーマ；授業前に 12/18
何かえの意見を聞いて、発展させる場合、自分が常に何かを考えていることが大切だなと思う。

テーマ；授業を終えて(1限) 12/18
地域と学校の協力は不可欠な事なのに現実にできていない、という点に疑問がわいた。

テーマ；授業を終えて(2限) 12/18
人の意見を聞くことによって、自分の意見を言うことによって、生活の中で"考える"ことが多くなった。

テーマ；最後の授業において 1/14
チーム活動の、協力体制が整うまでは苦労があるけれど、一緒に何かできることはすばらしいと思った。

テーマ；自分なりの生活指導観はできたか 1/14
生活指導は幅の広い教育を可能にすると思う。指導観はだいぶできたが、自分だけで指導ができるとは思えない。

生活指導に対する考えがまとまった。
考えをまとめる方法を私なりに学んだ。
自分自身の意見は常にもっていたいと思う。

⑩

学び

喜び

12/10
班が結束が楽しみ

12/10
起をしてがつかみ

、相手もする。

テーマ；発表をひかえて 11/26
他人に わかってもらえる発表をしたい。⑦

テーマ；発表を終えて 12/18
発表後は常に自己嫌悪におちいる。他人の発表が上手く見えてしかたがない。
一生懸命やっただけ、自分に満足感が返ってくるのがうれしい。

H コメントありがとう～私たちの発表に対しての n のコメント～

学校の生活指導は体制側に利用され易いものだと感じました。教師側もますそのあり方を明確にしておく必要がある。

政治の影響を受け易い「教育」だという指摘があったが、今は指導要領も文部省の政策にのっかっている気がします。

政治・経済・教科指導・生活指導が生活綴方運動を通して、革の根的な民間運動によって支えられて変わってきているのがわかる。

歴史的に生活指導を見ると、戦争の影響力がわかる。しかし、一部の熱意ある人々によって生活指導が発展していったことは画期的。

自分達が頑張ってした発表を理解してくれたかどうか、大変気になるところであるので、コメントはうれしい。⑨

図解 1

学びのプロセス図解 ～授業を

A 最初は混乱してばかり

テーマ；授業が始まる　9/4

後期にたくさんの授業が入り、混乱している。この生活指導も前途多難である。

テーマ；最初の授業を受けての感想　9/4

以前の履修者から聞いたとおり、ちょっとハードな半期が始まりそうな予感ができました。

自分の意見をおぼろげながら人に言うことで、しっかりした考えができてしまうことに気付いた。“話をする”ことは重要な事だ。

①

B テーマをしぼって考える

テーマ；レポートを書いて　10/1

学校五日制が実施され、学校外での生活指導が改めて見直される必要が生じていると思う。

テーマ；グループでの話し合い　11/26

生活綴方運動と天皇制の日本の教育のあり方の狭さについて。

最初は何について学ぶか、何を問題とするか考え出せなかったが、問題点、欠点、矛盾点を自分なりに多少見つける事ができてくる。1つのことからを堀り下げて考えるきっかけとなった。

②

C ラベルを通しての学び

とまどい

テーマ；ラベルワークをして　10/8

ラベルがまとまらなくて苦労しています。本当に困っています。表現にふりまわされそうです。

テーマ；今日の授業を終えて　10/8

皆、しっかりした意見をキチンと言うので感じました。自分がハズカしいです。

テーマ；今日の授業を終えて　10/15

ラベルを無理矢理 結びつけて書いたので、今ひとつ まとまらなくなってしまいました。

とにかく皆が納得するまで話し合う事に重点をおきました。日本語の難しさを痛感しました。

③

不安と期

テーマ；発表を来週にひ

頑張っても 今日中にしあげる。…ことは

テーマ；今日の授業を

スゲにエキサイトした話し

週を重ねるごとに、になり、到達目も固なってきた。④

E まだまだ学び足りない?!

テーマ；今日の授業に先生がいない。12/3

聞きたいことがすぐ聞けない不便さを感じる。来週の発表の形態は？時間は？先生がいなかった日、自分達で話合いをしたりと手際よくしたつもりだったがわからない点がでると、すぐ思考がSTOPした気がした。参画にはまだまだ！

F レポートを通しての学び

テーマ；今日の授業を終えて　10/1

友人と互いにしあうコメントは初の試みで少し緊張してしまいましたが、自分の意見を認めてもらうのは うれしい。⑧

テーマ；レポートを書いて　10/15

テーマ自体は深刻なのに、こんなに軽々と書いて良いのだろうか。

最初の頃に比べて、レポートをスラスラ書けるようになったのは、自分の考えがまとまってきたからだと思っている。

G 発表を通しての

とまどい

テーマ；教科書をまとめて　12/3

教科書の分担部分の発表のしかたがわからない。⑤

自分の考えがまとまらないうちは発表するのは無理だと思う。

向上

テーマ；発表をひかえて

授業前、教室に入ると、発表いくまで話し合っていた。発表である。⑥

テーマ；発表を聞いて

発表者がキチンと問題提まとめてくれるので、ポイントやすくなったと思う。

自分が理解していないことは理解できないと思って発表

ム内討論を行った。PR図解の［B］を見ると、「②何を問題とするか考え出せなかったが、（班員の人と話をすることで）自分なりに多少見つける事ができた」とある。

他者との交流活動を行うことで、自分なりの物の見方を改めて問い直している姿がうかがえる。また、集団でひとつのテーマを掘り下げて考えるということの重要性を感じたようである。しかし、授業全体としては、あまり活発な意見交換はまだ行われていなかった。

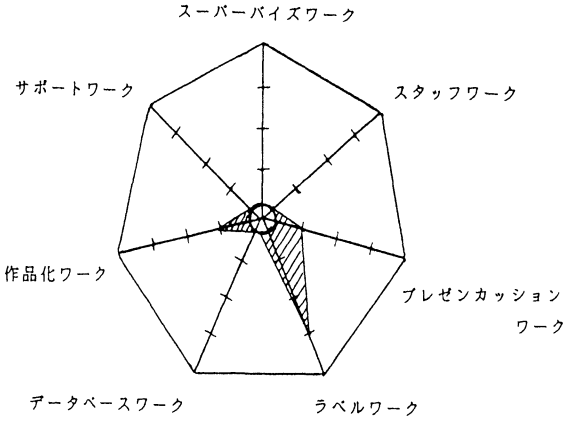
図2のレーダーチャートは、この時期の学生の参加の程度を、先述した七つのしくみの達成度合いに沿って表わしたものである。「感想ラベル」の導入などから「ラベルワーク」のみは充実しているが、その他のしくみは、まだ見られない状況である。

三回目の授業の放課後、一人の学生B君が筆者の研究室を訪れ「次回から数回の授業の企画・運営を学生にやらせてもらえないか」と提案してきた。筆者は即座に快諾した。こうして、本授業の最大の特徴である、学生による「部分参画」がスタートした。

四～七回目は学生主催の「ラベルワーク」が実施された。一～三回の授業で行った、現在の子供の生活の現状・原因・解決策それぞれについて出たみんなのデーターを整理し、チームとしての考えがまとまるように、クラスを三チームに分け開始した。［C］を見てみると、「③みんなしっかりした意見をきちんと言うので感心しました。自分が恥ずかしいです」という感想が残されている。しかし五、六、七回目と回を重ねるごとに、「④意見交換が活発になり、班員も団結し、とても楽しくなってきた」という感想に変わってきている。確かに、教室のいたるところで本質をついた発言が飛びかっていた。誰一人はずれることなく、集中してひとつの議論を交わしている様子に、改めて授業本来の姿を感じた。

また、この時期、教室での活動では間に合わ

図2



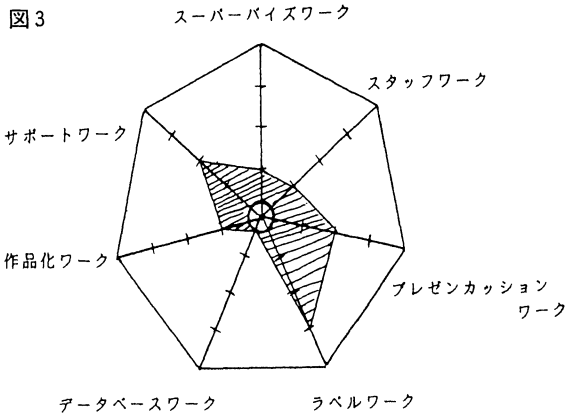
ず、放課後自主的に集まって活動していたようである。後日談だが最初はみんな仕上げないといけないので仕方なく集まっていたが、作業が進むにつれてそのプロセスが楽しくなりアルバイトや他の都合を変更して集まってくるようになったそうである。「この授業が一枚の図解だとしたら、私たちは一枚一枚のラベルで、一人ひとりの居場所がある」という感想ラベルが提出されたのはこの時期である。授業に自分の存在が反映しているという自覚が生まれたのである。参画意識の芽生えである。

八、九回目の授業では、完成された図解（図解2は、解決策担当チームの作品）の発表会を行った。持ち時間内でいかに分かりやすく自分たちの考えを伝えるか、各班工夫を加えていた。ここで、「部分参画」は一区切りして、教師に授業進行のバトンは手渡される。

図3のレーダーチャートには、「スタッフワーク」「サポートワーク」「スーパーバイズワーク」といった人的資源（ヒューマンリソース）のかかわりが顕著にあらわれている。これは、学生有志による「部分参画」の取り組みが始まったことで、学生に授業で責任あるポジションを果たす必要性が生まれ、それに伴い参画授業特有の、授業を支える人的バックアップ体制が整えられて行ったことが伺える。

十～十二回目は、教科書を使って生活指導について班単位で研究し、全体で発表を行った。教科書はあくまでもひとつの考え方としてとらえ、自分なりの生活指導観を探究することがねらいである。PR図解を見てみると最初、「⑤発表の仕方がわからない」という不安な気持ちも見れるが、「⑥授業前、教室に入ると発表班が納得いくまで話し合っていた」とあるように周囲の発表に対する熱心な取り組みに刺激され、「⑦他人にわかってもらう発表をしたい」という前向きな姿勢に変わっている。そして、一生懸命やったことは必ず自分にプラスとしてかえってくることを実感している。また、発表に対して、コメントを

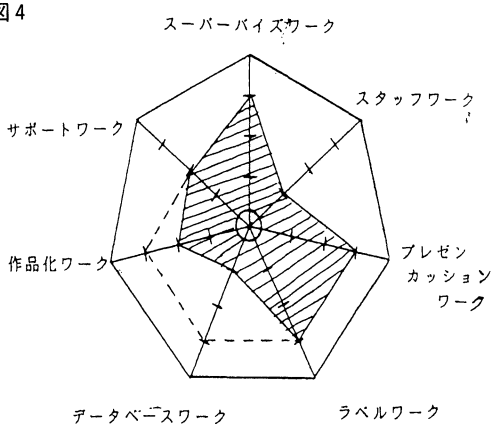
図3



受け渡しする作業について、「⑧自分の意見を認めてもらうのはうれしい」あるいは、「⑨自分たちが頑張ってした発表を理解してくれたかどうか大変気になるところなので、コメントがもらえるのは本当にうれしい」という感想が見られる。Aさんが、明らかに参与段階を実感しているのがわかる。

最終の授業では、自分たちが作成したPR図解を見ながら半期の自己の学びを振り返り、評価を行った。多くの学生が、毎回何気なく書いた感想ラベルが、自分の学びを顕著に表していることに驚きを感じていた。

図4



こうして授業は終了したわけだが、学生にはどのような学びが残ったのであろうか。PR図解を作成したAさんによると、①自分の中に問題意識というものが存在するようになり、常に自問自答するようになった。②ひとつのことを探り、考え、人と意見を交わすことの大切さを知った。③一生懸命したことは何か必ず得るものがあり、無駄な経験というものは存在しないと強く感じた、と記している。

授業終了時を、図4のレーダーチャートであらわしてみると、「作品化ワーク」が充実してくる。これは、各自が「PR図解」や授業のファイルを作成したことによる。全体的に、七つそれぞれが充実してきてはいるが、「スタッフワーク」はまだ未発達であった。この後、個人ファイル・グループファイルを提出させたので、最終的には破線で示したように「作品化ワーク」「データベースワーク」も充実した。

学生による「部分参画」

次に、ラベルワークを提案し、学生による「部分参画」の推進リーダーであったB君が作成した手記をもとに、授業の様子を見ていくことにする。やや長い引用ではあるが彼の生の声を聞いてみよう。

―　教職課程科目の一つである「生活指導論」は、「他

人からのうけ売りではない、自分なりの明確な生活指導観を築くこと」を目標としてスタートした。

一～二回目の導入授業の後、三回目の授業から、現在の子供の生活の現状とその原因を考察した。しかし、頭の中でしっかりと整理のつかない人が多く、ありきたりの考察に終わってしまった。授業終了後、先生にお願いしてみんなが書いた感想ラベルを見せて頂いた。すると、考えがまとまらないで悩んでいるのは自分だけではなく、クラスのみんなが悩んでいるということに気がついた。そしてそれならば、何とかしてみんなでこのことを解決していけないだろうか思った。そんな折、以前体験した「ラベル思考」という手法を思い出し、この「生活指導論」でやってみたらどうかと思った。これが、私が「ラベルワーク」を提案した動機である。

四回目の授業の前に、先生とのミーティングで「ラベルワークを授業に用いたらどうか」という提案をしたところ先生は「やってごらん」と喜んで賛成してくれた。しかし、実際にやっていくにあたりいくつかの問題があった。

第一には、大多数の人がラベルワークなど一度もやったことがなかったので、いかにわかりやすくラベルワークを説明して進めていくかということ、第二には、自分のラベルワークへの知識不足をいかにして補っていくかということであった。また、先生に提案し、承諾してもらったものの「みんなに自分勝手なことを押しつけているだけなのではないか」といった不安は、ラベルワークの授業を通じて消えることはなく、いつの授業においても、勇気を絞りながらやっていた。さらに、クラスの中から「難しい」「訳が分からない」「先生に直接教えてもらいたい」といった声が上り、自分のやっていることに自信が持てなくなってしまった。

しかし、作業が進んでくるにつれて、しだいにクラス内の雰囲気が変わってきた。ラベルワークは四回目から七回目までと長期の活動になったが、実際に作品としてでき上がってくると、クラスのあちこちから、「ラベルワークってすごい」といった言葉が聞こえてきた。多くの人が、ひとつの作品を作りあげること自体に興味と感動を示してくれたことがなにより嬉しかった。

出来上がった作品を発表する段階になると、みんな、

改革を通じて
るべき姿を見つめ直し合う.

それぞれの
把握し合う

大人の社会と子供の社会の境界を考え直してみる
(はっきりさせる必要があるか 藤中)

E 大人も子供もゆとりをもって
人生とは何かについて真剣に考える

大人がもっと余裕をもった
生活を送るべきである

大人社会の変革が
必要. 藤中

まずは周りの大人が
余裕のある生活をする.
矢城

社会全体が人生に
ついて真剣に考える

大人も子供も人を本当に
幸せにするかつは何か各々の人が真剣に考える. 宮本

大人も子供も長い目で
物事を考えていけるようにする. 小野寺

親と教師が今の子供が
社会の担となる将来を
頭に入れて教育すべき. 渡辺

F 人との交流を通して自己と他者との
協働力を見出す

人と人との心の
交流を活発にする

教師が愛をもって
生徒とのコミュニケーションをはかる. 樺沢

親と学校のつながり
をもっと強める.
森沢

頭ごなしに子供とぶつかるのでなく、理由をわからせて何が悪いのかを理解させる. つね

人と人とのコミュニケーションを
活発にする

地域ぐるみでの活動
を活発にやってみる.
森沢

人とのコミュニケーション
をもっと取れるようにする.
野本

集団の中で何かを生み
出す力を覚えさせる.
西尾

ついての
制度の

学歴社会、受験制度を
改革し、人間性を大切に
する

学歴より人間性を
大切にする. 野本

備考欄生徒の受験
制度を改革する.
土屋

学歴社会が変化
することではないだろう
か. 大田

① 1992、11、6(金)
② 大学図書館, 教室
③ 1班
樺沢, 三枝, 関野
大関, 西尾, 野本
細井, 三浦, 渡辺(美)
④「生活指導論」のみんな
⑤「今日の子供の現状をふまえ、その解決策とは何か」
(図解テーマ)

図解 2

情報社会における教育の人としてあ

A 大人が情報に惑わされず子供の意志を尊重する

会社のランクと差別をなくす事。三枝

大人が誤りの情報にまどわされないことではないだろうか。太田

大人社会の理想をおしつけず子供に自由に行動させる

大人社会の理想を子供におしつけない。

学校や親が自分達大人の理想通りに子供を引はってはいけない。太田井

大人の考えていることが全て子供のためになるとは限らないことを大人が自覚する。

親や子供自身が外見をなみれを捨て、内面を尊重する。 渡辺(美)

親や社会が子供をもっと信頼し、ある程度自由に行動させる。三浦

C 子供と大人が世界を互いに

子供や社会に現状を互いに把握させる

子供や社会が専門カウンセラーによる現状分析と学校家庭に対してのアドバイスをする。 ヤマウラ

子供に現実を認識させる。ex)社会見学ボランティア など。 樺沢

B 大人が子供中心の教育とは何かを考え学校システムを改める

受験体制の改正や登校拒否の防止を考え子どもにとって魅力ある学校運営をする

受験などの体制を改める為、現在の6・3・3体制を改革すべきだ。藤沼

子供の個性をのばすことが出来、ゆとりのあるカリキュラムが必要で

(学校では)生徒の個性がのばせる授業、教育内容の再検討。宮本

授業時間の削減、あるいはカリキュラムの再考が必要。宮本

登校拒否(不登校)を防止するため子供にとって魅力ある学校運営を事。

これから登校拒否を防止するため子供の生活習慣を身につけをする。 英輪

子供にとって魅力ある学校運営が必要である。 廣中

学校で教科以外の課外授業を充実させる。 前原

大人も子供も教育に意識を改革し、教育見直しをする

生徒・親・教師に忘れられた教育についての意識を改革する。藤沼

自分の発表を良くしたいという気持ちから、授業に対する積極性が出てきた。辛さを超えた学ぶことの面白さを知り、本当の意味で授業に参加できてきたのだと思う。

こうして半期の生活指導論は幕を閉じた。しかし、私の中には、自ら企画し、達成したことへの喜びと同時に「自分がやったことはこれでよかったのだろうか」という気持ちが残っていた。そんな折、生活指導論を受けた人から手紙をもらった。私は、自分のやったことをしっかり受け止め、評価してくれる仲間が一人でもいたことがとても嬉しかった。そして、この時、初めて、自分のやってきたことが、しっかりみんなに伝わり、みんなに支えられていたことがわかったのである。

私はこの授業を通じて、「学ぶ」ということは人との相互の「学び合い」を指すのではないかと思った。悩むことも苦しいこともあったけれど、人との学び合いを通じて創造することの喜びを分かち合い、さらなる学びへの意欲をかきたてられることになった。

彼の手記からも伺えるように、この間の授業における企画・運営は、学生有志によって主体的に行われた。各チームのリーダーが自分のチームを良く引っ張って、彼をサポートしたことも特筆に値する。この活動を通してクラスという共同体が、自ら立ち上がり一体となって「生活指導観」を構築するという知的生産活動を行った。さらに学生は、結果的に自分なりの考え方を視覚的に表す手段を体得した。同時に、授業自体に関わっていくことの意味が実感として把握でき、本当の意味での〝学びの所有者〟としての自覚を促すことになったといえる。

以上、「生活指導論」の実践事例について詳しくみてきたが、本授業では、すべての学生が直接参画的な取り組みはできなかった。しかも、わずか四回の「部分参画」という形で展開した。しかし、A・B両君の作品が如実に示すように、B君の体験を間接的に体験することで、参画的経験を全員が共有化できたと考えられる。このことは、後に提出された学生の諸作品が証明している。

もちろん、全員の学生が、最初の自分の考え方の枠を越えて、自分なりの「生活指導観」の〝原型〟を構築できたことは、提出された作品で確認できた。この〝観〟の変容・形成のダイナミックなプロセスについては、稿を改めたい。

おわりに

「参画授業」に、暗にプログラムされているねらいの一つは、自分の言いたいことがない、言えない、書けないという自己の表現能力の貧弱さを、学生が自分自身で直視せねばならない事態に直面させることである。大学で一般に行われている授業では、このような事態に学生が陥るような場面は少ない。従って多くの学生は、このような場面を自分自身、または仲間で解決していく手段を知らない。例えば、チームで討論や研究活動を行わせようとしても、どうすれば良いのかまるで要領を得ない学生が多い。

実は、この事実に筆者自身愕然とさせられたことが、この参画授業を開発するきっかけになった。もう十七年も前の事である。このような現状の背景には、それまで彼らが学んできた学校教育において、自分のこととして引きつけて考えねばならない問題解決の状況設定が充分なされていなかったことが考えられる。彼らは、受験勉強さえしていれば良かったわけである。だから個人でまったく未知の問題を解決していく必要もなく、まして集団で一つのことを問題解決的に探究することもなかったわけである。こう考えてくると、教師・学生双方の問題解決活動による「参画体験」の不足が今日の大学教育の危機の根底にあると言えるだろう。本稿では、このような現状を解決するための一方法論として「参画授業」を紹介してきた。

ところで今、学生にとって最も必要なことは、授業が、彼らの生き方を真剣に考えられるような〝学びの場〟として存在することである。そのためには、学生一人ひとりにとって、生き方が問われるような、他人事ではない切迫した場面状況が、授業の中に出現しなければならない。

二人の学生の作品には、まさにこの状況が良く現れている。Aさんの「PR図解」を見ると、「当惑と期待→不安と模索→自省と達成」といった矛盾の段階を克服しつつ、学びが深化していっていることがうかがえる。このプロセスは、「ラベルワーク」を企画した学生B君の手記の中にもあらわれている。

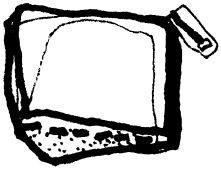
ここで注目したいのは、当惑・不安・自省の中にも、それらを乗り越えていくための自らの意志による、さらなる学びへの模索とその克服があるということである。彼らは「ラベルワーク」という手段を使い、チームの問題を整理し、解決していった。そのプロセスで、仲間の支えのありがたさを実感し、授業自体をみんなで良くしていこうとする、真に主体的な参加の姿勢が生まれてきたのである。こ

のプロセスこそが、参画授業が教育目標とする「参画力」が育まれていく確かなプロセスなのである。

もう一つ注目すべきことは、Aさんの図解の［E］の表題になっている「まだまだ学び足りない」という感想である。これは、授業半ばにして、主体的な学びとは何なのか、どうすることが参画なのかが感覚として確かにつかめてきた現れである。参画授業の体験を通じて、自分が今、主体的であるか否かの自己評価力が形成されてきたのである。このように、自己の学びを自ら評価しながら、自らの学びを押し進めていく力の形成こそ、「参画力」教育のもう一つの主眼である。

今後、大学のサバイバルをめざして、学びの質という点からの吟味を行う時、学生自らが、大学という学び舎に根を張り、しっかりと授業にかかわり、これを担える力をつけるような教育システムが、必要とされてくるであろう。参画授業の理論と方法は、この、「真に主体的に学びに参加する」ということを、実感を持って直接体験することを根本的なねらいとしている。

□　　□

ところで本稿は、まさに学生参画的に作品化された。というのは、「参画授業」を体験した大学院生、学部生が貴重な協力を惜しみなく与えてくれたからである。すなわち本稿は、現在「参画」に関する研究を進めている竹迫和代（日本大学大学院）を中心に、「部分参画」を提案・実行した女部田武史（武蔵大学経済学科四年）、さらに本方式に関心を持つ中原リサ（武蔵大学金融学科二年）と筆者の合作である。特に、図1は竹迫の工夫によるものであり、レーダーチャートは、女部田、竹迫の工夫である。

もし本稿が、いきいきした学生の息吹を伝え得たとすれば、これらの学生諸君の力によるところが大きい。